

メランコリー論として見る初期フロイトの歩み — 「躁的防衛」から「投影性同一視による喪の仕事」へ —

網谷 優 司

はじめに

「精神分析学 (Psychoanalyse)」という学術ジャンルは、ウィーン大学医学部で神経医学を学んだジークムント・フロイト (1856～1939) が 1896 年に論文中で „psycho-analyse“ という名前を用いたことに端を発する。¹ それ以降、精神分析運動は世界各国に広がる中で分派と学派間対立を繰り返しながら今日まで続いている。

この学問の最低限の基本的な特徴をまとめるならば、心の働きの中で「無意識」の機制を想定し、父・母・子の三角形の中で働く性愛を中心とした複雑な感情を探查し、解きほぐすことで神経症などの精神病理に迫る、ということになる。特に、「エディプスコンプレックス (Ödipuskomplex)」の発見はフロイトの学問的営みの中枢をなすものであり、フロイトは、精神病・神経症・倒錯を含めた様々な心的現象の原因をこの感情コンプレックスに求める。

エディプスコンプレックスは、フロイトが 1896 年に父を亡くしたころから本格的に始められた友人の耳鼻科医ヴィルヘルム・フリースとの往復書簡の中で、自身が見た夢などを分析する過程で発見された。こうしたフリースとの往復書簡は、フロイトの「自己分析」と呼ばれ、精神分析家としてのフロイトを形成する基盤となった。

この「自己分析」に進展がみられるのが父の死の直後からであったということに鑑みて、フロイトの「自己分析」が、父というフロイトにとって極めて大切な対象の喪失に伴う「喪の仕事」であるという説は先行研究においても幾度か示されてきた。²

*本稿は、2021 年度の日本独文学会京都支部春季研究発表会における口頭発表『メランコリー論として見る初期フロイトの歩み——「躁的防衛」から「投影性同一視による喪の仕事」へ——』に加筆修正を施したものである。

*本稿におけるフロイトからの引用はおもに以下のものから行い、略号「StA」と巻数・頁数を示す。なお、原文がイタリックになっている個所には、傍点を振った。Freud, Sigmund: *Studienausgabe*. 10 Bde. Hrsg. v. Alexander Mitscherlich, Angela Richards und James Strachy. Frankfurt am Main 1969-1975.

¹ ジャン・ラプラランシュ/J.-B. ポンタリス『精神分析用語辞典』(村上仁 監訳) みすず書房 1977 年、269 頁以下参照。

² 小此木啓吾『対象喪失 悲しむということ』中公新書 1979 年、97~125 頁参照。あるいは、Vgl. Schimmel, Paul: Freud's "selected fact": His journey of mourning. In: *The International Journal of Psychoanalysis* 99 (2018), S. 208-229, hier S. 213-216.

「喪」という概念は、フロイトが『喪とメランコリー』（1915）の中で、メランコリーに近似する心的過程として示したものである。この論文で提示されたフロイトのメランコリー論は、精神分析学界内での一つの大きな勢力である対象関係論学派の嚆矢となったメラニー・クライン（1882～1960）に多大な影響を与えた。³

そこで本稿では、フロイトの「自己分析」が、「喪の仕事」の一環であったという先行研究の見解を引き継ぎつつ、この「喪の仕事」がフロイトにとって精神分析学の創始へとつながる重要な意義を有していたという従来は見落とされていた側面に注目したい。具体的には、父の喪失直後のフロイトの反応から、フリースとの往復書簡における「自己分析」、ひいては初期フロイトにおいて極めて有名な症例である「鼠男」と呼ばれる強迫神経症患者の治療の営みを、クラインのメランコリー論の概念を用いて跡付ける。管見のかぎり、これまでの精神分析におけるメランコリー論の学説史は、フロイトからクラインへの前進的展開をつまびらかにすることに重点が置かれていたが、⁴ 本稿は精神分析学創始期のフロイトが経験したメランコリーに陥る危機としての父親喪失に対する「喪の仕事」を、クラインの理論や概念から逆照射することに特徴がある。自らの精神分析家としての営みの大半を、メランコリーとの対峙に費やしたクラインの業績を参照することで、フロイト自身が陥っていたメランコリーの危機を精神的に新たに跡付け直すことが可能になるだろう。

本稿の構成は以下の通りである。まず、1章ではフロイトのメランコリー論を概観し、それがどのようにクラインに影響を与えたのかを検討する。2章ではフリースとの往復書簡によって自己分析を始める前のフロイトの亡父への態度を「躁的防衛」というクラインの概念を用いて説明することを試み、3章では「転移」という精神分析の鍵概念によって「自己分析」がフリースに父親像を重ねることによってなされたフロイトの父親喪失に対する「喪の仕事」であったことを確認し、さらにこの営みがエディプスコンプレックスの発見につながっていることを主張する。そして、4章では「鼠男」と呼ばれるエルンスト・ランツァーという強迫神経症患者を治療する際のフロイトの姿勢を、クライン派が言うところの「投影性同一視」であると同定し、フロイトが父との葛藤に苦しむランツァーに「共感」しながら、治療を進めることで、それがひいてはフロイトにとっての「喪の仕事」として機能していた可能性について論じたい。

³ 21世紀の対象関係論学派を代表するオグデンもやはり、自身の学派の端緒をフロイトのメランコリー論に見ている。Vgl. Ogden, Thomas: A new reading of the origin of Object – Relations Theory. In: *The International Journal of Psychoanalysis* 83 (2002), S. 767-782.

⁴ 以下では、アリストテレスから始まってフィチーノやバートン、ゲーテ、カント、ボードレールさらにはクリステヴァにいたるまでのメランコリー論が概説されている。ここでもフロイトのメランコリー論が紹介された直後に、それを引き継いで発展させた人物としてクラインの名が挙げられ、彼らの精神的メランコリー理解が紹介されている。Vgl. Radden, Jenifer: *The Nature of Melancholy. From Aristotle to Kristeva*. Oxford 2000, S. 281-310.

以上の論を経ることによって、メランコリーという病に陥る危機から脱するための「喪の仕事」の遂行が、フロイトにとって、エディプスコンプレックスの発見や強迫神経症の治療法の確立といった精神分析学の根幹を形作ることを可能にするうえで不可欠なものであったということが、クライン派用語で端的に指摘できる。

1. フロイトのメランコリー論とそのメラニー・クラインへの影響

1-1. 『喪とメランコリー』概観

本節ではまずフロイトが初めてメランコリーに対峙した論文『喪とメランコリー』⁵の内容を概観する。

フロイトはこの論文において、メランコリーという病的現象を解明するため、対象喪失に際する正常な反応としての「喪 (Trauer)」の特徴を述べる。対象喪失とは、「愛する人や、愛する人に匹敵する概念、つまり祖国、自由、理想など」⁶を何らかの形で失うことである。そして、喪の状態にある人は、「深刻で痛ましい気分、外界への関心の喪失、新たな対象を選択する能力の喪失、あらゆる行動の抑止」⁷に苦しむ。では、喪の状態において人の心はどのように働いているのだろうか。フロイトはそれを精神的に以下のように説明する。

現実検討が、愛する対象がもはや存在しないことを示し、すべてのリビードをその対象との結びつきから解放することを要請する。(中略)しかし、この課題はすぐに実現できるわけではない。長い時間をかけて、備給エネルギーを多量に消費しながら、一步步実現されていくのであり、その間は失われた対象が心の中に存在し続ける。リビードがその中で対象に結び付けられていた想起や期待にひとつひとつ焦点が合わせられ、過剰備給される。そして、リビードの解消が実行される。(StA 3, S. 198f.)

リビードを備給していた対象、すなわち愛していた対象がもはや自分にとって失われているということは、なかなか受け入れがたいことである。近親者との、ひいてはペットなどとの死別、追い求めていた理想の破綻、恋人との破局など、深刻さの程度の差こそあれ、我々の身近に対

⁵ フロイトは『喪とメランコリー』を草稿段階から、カール・アブラハムに読ませていた。後述するが、アブラハムはクラインの訓練分析を引き受けた人物であり、クラインの理論にはアブラハムからの影響が色濃くみられる。こうしたことから、フロイトのメランコリー論はクラインの対象関係論に大きな影響を与えたことがわかるのである。Vgl. May, Ulrike: In conversation. Freud, Abraham and Ferenczi on “Mourning and Melancholia” (1915-1918). In: *The International Journal of Psychoanalysis* 100 (2019), S. 77-98, hier S. 80-83.

⁶ StA 3, S. 197.

⁷ Ebd., S. 198.

象喪失はあふれている。その対象喪失に対する反応としての喪の状態にある人は、対象に備給していたリビドを解消するのに苦しむのである。

ところで、話をメランコリーに移しても、苦しみについてはほとんど同じことが言える。メランコリー患者は喪の状態にある人と同じような心的苦痛を体験しているのだ。しかし、その苦痛には、喪では見られないような、メランコリーの場合にのみ存在する要素がある。それは、「自己感情の低下」である。

メランコリー患者は、ことあるごとに自責の念に駆られ、自己を蔑み、自傷行為に走ってその果てには自ら死を選ぶ者もいる。こうした特徴は一般に喪に服している者には見られない。

しかし、フロイトはやはり「メランコリーもまた愛する対象の喪失への反応であることは明らかである」⁸ という。喪は正常な心的過程だが、同じく対象喪失状況にあっても、病的な素質が疑われる人には、メランコリーのメカニズムが働きかねないのである。では、メランコリーのメカニズムとはいかなるものか。フロイトの精神分析的説明を引用しよう。

まず、ある対象選択、特定の人物へのリビドの拘束があった。ところが後に、愛する人物から実際に侮辱されたり、失望させられたりすると、その影響によって対象関係に動揺が生じる。それに引き続いて起こるのは、その対象からリビドを引きはがして、新たな別の対象に移動させるという正常なものではなく、もっと多くの条件が必要とされるように見える帰結であった。対象備給はほとんど抵抗することなく放棄されたが、自由になったリビドはほかの対象に移動せず、自我の中に引き戻された。しかし、リビドは、そこで自由に使われるのではなく、放棄された対象を自我に同一化させるために用いられる。このように対象の影が自我の上に落ちて、自我は今やある特別な審級から、あたかも一つの対象、放棄された対象と判断されるようになる。このようにして対象喪失は自我喪失に変わり、自我と愛する人との葛藤は、自我批判と、同一化によって変化した自我の内部分裂に変わったのである。(Ebd., S. 202f.)

要点をまとめると以下のようなになる。喪では、対象に結びつけられていたリビドが解消されると別の備給対象に向かうのだが、メランコリー患者においては、リビドが自我に引き戻され、失われた対象との同一化のためのエネルギーとして使われる。フロイトは後の部分でこの同一化を「ナルシズム的同一化 (die narzißtische Identifizierung)」と呼ぶ。この場合、自我に同一化される対象はすでに失われているのだから、ナルシズム的同一化の結果、自我は貧困

⁸ Ebd., S. 199.

化する。そして、貧困化した自我は、次節で検討する「ある特別な審級」に責めさいなまれるという内部分裂に陥るのである。

対象喪失に対して、喪で反応するかメランコリーで反応するかを決める要因は明らかにされていない。しかしとにもかくにも、病的な素質が疑われる人は、上記のような形で喪の苦しみに自己感情の低下が加わったさらなる苦痛を味わわなくてはならないのである。

1-2. 『快原理の彼岸』と『自我とエス』におけるメランコリー論

『快原理の彼岸』(1920)というテキストにおいて、フロイトは直接的にメランコリーを論じるわけではないけれども、以前の自身の欲動論を刷新して、エロスと呼ばれる「生の欲動 (Lebenstrieb)」と、それに対置させる形で「死の欲動 (Todestrieb)」という概念を提唱する。そしてこの「死の欲動」概念が、『快原理の彼岸』の補足的な意味も込めて書かれた『自我とエス』(1923)において、メランコリー論に応用されることとなる。

ここでは紙幅の関係もあって、『自我とエス』という含蓄に富んだテキストについて、その全体像を要約して提示することはできない。よって、本稿の肝であるメランコリー論に関わる部分のみ簡単にまとめてみよう。

本稿冒頭で説明した通り、エディプスコンプレックスはフロイト理論にとって中核をなすものだが、『自我とエス』においてエディプスコンプレックスは、「超自我 (Über-Ich)」という心的審級の発見をフロイトに促した。そしてほかならぬこの超自我こそが、前節で言及した『喪とメランコリー』における「ある特別な審級」なのである。

およそ3歳から6歳ごろに「男根期」に突入していわゆるエディプス状況におかれた男児は、母親に性的関心を向け、母親の独占を阻む存在としての父親に敵意を抱くようになる。⁹しかし、母との性的結合を求めて父親と対立すれば、明らかに自身より強大である父親は、「去勢不安 (Kastrationsangst)」でもって脅しをかけてくることに男児は気づく。こうした状況に直面して男児は、母親への欲望を断念し、強大な父親像を自身の心に同一化する。フロイトはこの同一化を「一次同一化 (die primäre Identifizierung)」と呼ぶ。こうして一次同一化を経て築かれた心的審級をフロイトは「超自我」と名づけ、超自我が父親の厳しきで自我を支配することで、人々は道徳心や良心を発揮できるようになるのである。

⁹ フロイトが女兒の場合のエディプスコンプレックスについて本格的に論じるのは、『エディプスコンプレックスの崩壊』(1924)、『解剖学的な性差の心的帰結』(1925)を俟たねばならない。女兒にとっても最初の愛の対象は母親なのだが、男根期になって、母親と同じく自分にはペニスがないことに気づいた女兒は「ペニス羨望 (Penisneid)」に陥り、ペニスをくれなかった母親を恨み、それを持つ父親を性的に欲望するようになる。こうしたエディプス状況は「去勢不安」によっては克服されえないので、フロイトにとって女兒のセクシュアリティの発達は男児の場合より謎に満ちていた。Vgl. StA 5, S. 243-266.

そして、『自我とエス』では『喪とメランコリー』の「ある特別な審級」つまり「超自我」がメランコリー患者に引き起こす自我の内部分裂の内実が明らかにされる。フロイトは『自我とエス』第5章において、「罪責感」が顕著にみられる疾患として、強迫神経症とメランコリーを挙げて、強迫神経症との比較を交えてメランコリーについて以下のように説明する。

メランコリーでは超自我が自らに意識を引き付けているという印象がさらに強くなる。しかしこの疾患では、自我は異議を唱えない。自我は明らかに自らに罪があることを知っており、罰にしたがうのである。この相違についてはよく知られている。強迫神経症で問題となるのは自我の外部にとどまる不快な興奮である。しかし、メランコリーでは超自我が怒りを向ける対象は、同一化によって自我に取り込まれているのである。この二つの疾患において罪責感が異様なまでの強さに達する理由は自明ではない。しかしこの疾患の主要な問題は別の場所にある。(StA 3, S. 318)

ここで記述されている同一化とはもちろん、『喪とメランコリー』で「ナルシズム的同一化」と呼ばれていたものである。

そして、フロイトは上記引用に引き続いてあるヒステリーの症例を提示した後、「この疾患 [=メランコリー] の主要な問題」について、筆を進める。

まずはメランコリーについて検討しよう。過剰なまでに強い超自我は、意識を自らに引き付け、容赦のない激しさで自我を脅かす。まるで超自我は、個人の中であらん限りのサディズムを発揮するようである。私たちのサディズムに対する理解によると、破壊的な要素が超自我の中に沈殿し、自我に向かうようである。今や超自我の中で支配しているのは、純粹培養された死の欲動である。自我があらかじめマニー [=躁] に罹患することによって自身を暴君から防衛していない場合は、自我の死が本当に達成されてしまうこともしばしばである。(Ebd., S. 319f.)

『喪とメランコリー』で素描されたメランコリーの機制をフロイトはこのように『自我とエス』において詳述しているのである。その要点をまとめると以下のようなになる。

まず、対象喪失を体験した自我はリビドを自らに引き戻して、リビドのエネルギーを失われた対象とのナルシズム的同一化に用いる。それによって、超自我のサディズムが向けられる要素が自我の中に取り込まれることになるのである。そしてメランコリーという疾患では、超自我において、死の欲動が純粹培養されている状態にあるので、患者はメランコリーという病によって自ら死を選ぶということになりかねないのである。

1-3. フロイトのメランコリー論からメラニー・クラインの対象関係論へ

本稿冒頭でも述べたが、フロイト以降の精神分析運動の歴史は、分派と学派間対立の歴史でもある。¹⁰ その中でも本稿が関心を寄せるのは対象関係論で、これはメラニー・クラインに端を発し、主に英国で発展した。¹¹

本節でクラインの対象関係論を俎上に載せる理由はおもに二点ある。一点目は、精神分析学を創始・確立していくいわば初期フロイトの歩みをクラインの概念を用いて考察するために、クラインの対象関係論の萌芽を素描しておくことが必要だからである。そして二点目は、クライン派すなわち対象関係論の成立を促したのは、ほかでもなくフロイトのメランコリー論であるということだ。¹²

以下では、フロイトの「対象」概念が、メランコリー論を契機としてフロイト理論の中で重要視されていき、さらにはメランコリー論を経て打ち建てられたフロイトの「対象」概念をクラインがいかに捉え直したかを見ていく。

まず、フロイトが「対象」という概念をはっきりと規定するのは、『喪とメランコリー』とおよそ同時期に執筆された『欲動と欲動運命』（1915）の以下の個所である。

欲動の^レ対象とは、それを使って、あるいはそれを介して、欲動が目標に達することができるものである。対象は欲動に関わるもののうちでもっとも可変性があり、もともとからその欲動に結びついているのではなく、充足を得るのに適しているために欲動に組み込まれるだけのものである。(StA 3, S. 86)

ここで明らかにされているのは、欲動の「対象」とは、欲動の「充足」のために設定される偶発的手段にすぎず、極めて可変性に富んだものであるということだ。

¹⁰ フロイトの末娘のアンナ・フロイトによる「自我心理学 (Ich Psychologie)」、自我心理学と真っ向対立した「対象関係論 (Objektbeziehungstheorie)」、そしてジャック・ラカンという白眉によって築かれたフランスの「ラカン派」などが有名である。

¹¹ 対象関係論の特徴を簡潔に述べるなら以下のようなになる。すなわち、まずはフロイトの精神内界主義を徹底、純粹化する。そして乳幼児の主観的世界をそのまま表現することに努める。発達のごく早期に乳幼児が抱く無意識的幻想、その中の自己と対象像（主に母親）との関係、そこで働く原始的な防衛機制を解明するのである。小此木啓吾『現代の精神分析 フロイトからフロイト以後へ』講談社学術文庫 2002年、341頁参照。

¹² 同書、356頁参照。さらに、フロイトのメランコリー論から出発して、精神分析の学説史においていかにクラインの対象関係論が成立していったかを跡付けた研究として、藤井あゆみ『メランコリーのゆくえ フロイトの欲動論からクラインの対象関係論へ』水声社 2019年、が挙げられる。藤井のこの研究は、フロイトとクラインのみに言及するのではなく、フロイトからクラインへ至るまでの過程に、カール・アブラハムとサンドール・ラドーの研究が重要なものであったことを指摘している。

しかし、『欲動と欲動運命』と同時期に『喪とメランコリー』においてメランコリーの機制を検討したことによってフロイトは、「対象」概念の新たな側面を発見することとなる。『自我とエス』から当該箇所を引用しよう。

以前私たちは、失われた対象を自我の中に再建し、これによって対象備給を同一化によって置換する行為であるという仮定によってメランコリーの痛ましい苦悩を説明することに成功した。しかしその当時はこのプロセスの意味を完全には理解していなかったし、これがどれほど頻繁にしかも典型的に起こるのかは知られていなかった。その後、このような代償行為が自我の形成に大きな役割を果たすこと、性格と呼ばれるものを確立するうえで大きく貢献することが明らかになった。(Ebd., S. 296)

つまり、フロイトはメランコリー患者がおこなう同一化が、実はかなり頻繁に人間の心的生活のうちで起こっていて、自我の性格形成にまでかかわる重要性を持ったものだとすることを指摘しているのである。

このように、フロイトは『自我とエス』の中で心的構造にとって「対象」が持つ重要性を再認識しており、その認識を促したのは、ほかでもなくメランコリーの機制なのである。

では、フロイトのメランコリー論から多大なる影響を受けて自らの対象関係論を形成していたクラインの「対象」概念とはいかなるものであろうか。それは、フロイトの死の翌年に発表された『喪とその抑うつ態勢との関係』(1940)で示されている。少し長いですが、引用しよう。

周知のように、人はその発達の早期に自我の中に両親を確立する(メランコリーと正常な喪における取り入れの過程の理解から、フロイトが正常な発達における超自我の存在を認識したことはよく知られている)。しかし、超自我の性質と個人の発達史とに関して、私はフロイトとは異なった見解を持っている。すでに何度も指摘したように、人生が始まって以来、取り入れと投影の過程を通じて、愛する対象と憎しみの対象は私たち自身の内側に確立されていっているのである。これらの対象は「よいもの」か「悪いもの」と感じられ、相互にまた自己との間で関連し合っている。つまり、これらの対象が内的世界を構成しているのである。この内在化された対象の集合体は、自我の組織化と共に組織に編入されていき、心の高次の階層のうちに超自我として識別されるようになる。このようにして、おおまかにいえば、自我の中に打ち建てられた現実の両親の声や影響としてフロイトが認識した現象は、私の発見によれば、一つの複雑な対象世界である。これは個人にとって無意識の深い層の中で自分自身の内側に実在するように感じられるものである。それゆえ、

私と共同研究者の一部は、「内在化された対象」とか「内的世界」という用語を用いたのである。¹³

要点は以下の通りである。つまり、人は「人生が始まって以来」、対象を取り入れたり、投影したりしており、超自我はすでに乳幼児期に形成されつつあるのである。ここでクラインがフロイトを批判しているのは、フロイトが超自我の成立をエディプスコンプレックス崩壊後の「一次同一化」とともに位置付けたことである。クラインは、フロイトが父親とのこのような同一化によって形成されるとした超自我が、実は発達のもっと以前の段階で内在化された対象から構成される「内的世界」であるとして捉え直したのだ。¹⁴ 上記クラインの引用からは彼女が、人間の原始的な防衛機制や、取り入れや投影といった「対象」とのかかわり方に強い関心を持っていたことがわかる。この関心から、本稿でこの後言及する「躁的防衛」や「投影性同一視」といったクライン独自の着想が結実したのである。

2. 「父の死」という対象喪失と躁的防衛

1896年10月23日、フロイトの父ヤーコプ・フロイトは80年余りの生涯に幕を下ろした。このときフロイトは40歳。¹⁵ 前年にヨーゼフ・ブロイアーとの共著で『ヒステリー研究』(1895)を出版していたが、この本が「精神分析始まりの書」として盛んに読まれるのは20世紀に入ってからのことである。¹⁶

多くの人にとってそうであるように、フロイトにとっても父の死は、『喪とメランコリー』におけるフロイトの用語を使えば、まぎれもなく「対象喪失」であった。では、フロイトはこの対象喪失に対して正常な喪の仕事を行なうことができたのだろうか。結論を先取りしてここで述べておくと、それは1908年頃には完遂されたのではないか。逆に言えば、1896年の対象喪失に対してフロイトが喪の仕事を行なうには十年以上の歳月がかかったということである。この歳月についてはこのあと章ごとに「躁的防衛」、「転移」、「投影性同一視」などの主にクラ

¹³ Klein, Melanie: *Love, Guilt and Relationship and other works 1921-1945*. New York 1975, S. 362.

¹⁴ 藤井あゆみ「Freudの欲動論からKleinの対象関係論への移行——「うつ」の精神分析的研究における対象概念の変遷を手掛かりに——」：日本精神医学史学会『精神医学史研究』19巻2号（2015年）、61~70頁所収、67頁参照。

¹⁵ フロイトと父の関係についての伝記的研究は、以下を参照。Vgl. Krüll, Marianne: *Freud und sein Vater: die Entstehung der Psychoanalyse und Freuds ungelöste Vaterbindung*. München, 1979, S. 265-310.

¹⁶ 『ヒステリー研究』の初版は800部。初版の邦訳を手掛けた金関は、この本に対して当時、6本しか書評が出なかったことを指摘して、後年のフロイトの功績から考えると、その反応は「お笑いぐさだと言ってよい」としている。金関猛「はじめにヒステリーがあった。」：ジークムント・フロイト／ヨーゼフ・ブロイアー『ヒステリー研究〈初版〉』（金関猛 訳）中公クラシックス 2013年、5~75頁所収、25頁参照。

イン派精神分析の概念を用いて説明していくことにして、1908年にはフロイトの喪の仕事が完遂していたのではないかと考えられる論拠となるフロイトの言葉を引用しておこう。

私にとってこの本はほかにも、ある主観的な意義を持っているのだが、私がこれに気づいたのは後からのことだった。それは私にとって、自己分析の一部として、そして自らの父の死、すなわち男の一生において極めて意義深い喪失で、重要な出来事への反応として示される。(StA 2, S. 24)

これは、初版が1900年に出版された『夢解釈』の第二版の序文であり、1908年に書かれたものである。この時に至ってフロイトはやっと、父を喪失したことが自らにもたらした意義を客観的に振り返ることができている。

では、いったいフロイトの中の何が、父の死というある種ありきたりな対象喪失への喪の仕事の遂行を阻んだのか。本章では、フロイトの1890年代の神経症の病因論における父親像を手掛かりに考えてみたい。

1895～1897年の一時期、フロイトは「誘惑理論 (Verführungstheorie)」と呼ばれるものを自身の神経症論の要としていた。この理論は、フロイトのもとを訪れた患者が決まって、幼児期に父親から受けた性的ないたづらを証言したことから着想された。フロイトは驚きながらも、患者たちの証言をそのまま信じ、父親が自分の子供に対して性的に関与するという倒錯こそが、神経症の原因と考えたのであった。1896年4月にフロイトはこの考えを学会で発表し、クラフト＝エービングというウィーン大学の現役教授から失笑を買っている。しかし、それでもフロイトはさしあたり、誘惑理論に自信を抱いていた。¹⁷

1897年9月21日のフリース宛の手紙、いわゆる「取り消しの手紙」ではフロイトは友人フリースに宛てて、誘惑理論を自分自身もはや信じていないことを告白しているが、¹⁸ それでもフロイトが一時期、誘惑理論を信じ込んでいたのは間違いない。

そして驚くべきことに、フロイトは父の死後間もないころ、自らの父も「誘惑者＝性的倒錯者」であったと考えていた。1897年2月11日のフリース宛の手紙には以下のような記述がある。

¹⁷ 立木康介「精神分析と父」：京都大学人文科学研究所『人文學報』101号（2011年）、103～112頁所収、104頁参照。

¹⁸ Vgl. Freud, Sigmund: *Briefe an Wilhelm Fliess, 1887-1904*. Hrsg. v. Jeffrey Moussaieff Masson. Frankfurt am Main 1985, S. 283.

残念なことに僕自身の父親は倒錯者の一人でした。僕の弟(その状態はすべて同一化です)と下の妹たちのヒステリーはそのためなのです。こうした事情が頻繁に起こっていることは僕をしばしば憂鬱にします。¹⁹

次章で検討するが、フロイトがこの誘惑理論を放棄し、フリースとの手紙の中で誘惑理論に変わってエディプスコンプレックスを発見したことで、精神分析の胎動が始まったとされる。このフリース宛の手紙でフロイトは「転移の中の喪の仕事」を遂行するわけだが、こうした喪の仕事に取り掛かることに対して誘惑理論という着想は足かせとなった。誘惑理論はフロイトに、亡父への「軽蔑 (insult)」を促進させた。愛していたはずの対象が、いざ死んでいなくなってしまうたら愛が軽蔑に転じる。このような機制を、クライン派では「躁的防衛 (manic defense)」と呼ぶ。躁的防衛のさなかにあっては、人は対象とのあいだに、支配感・征服感あるいは軽蔑といった関係を築く。対象をこうした感情によって攻撃することで、主体は対象喪失の悲しみに対して防衛を行う。²⁰ 悲しむことができないということは、正常な喪の仕事が遂行されていない何よりの証である。²¹ また同時に、前に示した『自我とエス』からの引用でフロイトがメラニコリーに対する防衛として「マニー (躁)」を考えていたことも思い出されよう。フロイトが父の死という対象喪失を正常な喪の仕事で克服するのに長い時間がかかったと想定される理由の一つに、父を性倒錯者として軽蔑するフロイトの躁的防衛を挙げることができる。

3. 「転移の中の喪の仕事」としての精神分析

3-1. フリースへの転移

学派や時代によって詳細は異なるが、一般に「精神分析家」になるためには、「訓練分析」といって、自らが患者の立場に立って精神分析家から精神分析を施される体験が必要となる。例えば本稿で再三登場するメラニー・クラインは、カール・アブラハムというフロイトの高弟から訓練分析を受けた。

しかし、フロイトはいわば唯一、訓練分析を受けたことのない精神分析家である。理由は簡明で、そもそも精神分析という営みを「発明」したのが当のフロイト本人だからである。²²

しかし精神分析学を創始していく途上のフロイトには、訓練分析に相当する体験があった。それがいわゆる「自己分析 (Selbstanalyse)」である。この自己分析においてフロイトは、自らが見た夢や父親に対する複雑な感情を友人フリース宛の手紙の中に記し、それに自ら解釈を施

¹⁹ Ebd., S. 245.

²⁰ 小此木 (2002)、355~356 頁参照。

²¹ 小此木 (1979)、193~212 頁参照。

²² もっとも、フロイトは精神分析学の誕生には『ヒステリー研究』を共著したブロイアーの存在が欠かせなかったと述べている。Vgl. Freud, Sigmund: *Selbstdarstellung*. Frankfurt am Main 1999, S. 144ff.

している。こうした営みの中でフロイトは、父親への複雑な感情に関してフリースに「転移 (Übertragung)」を起こし、それに対して自ら解釈を与えていった。これを本稿では「転移の中の喪の仕事」と呼ぶ。フロイトの自己分析が始まった時点は父の死より前に位置づけられるようだが、²³ フロイトは父の死後、亡父に関する思い出を毎日のようにフリース宛の手紙に綴るようになる。

フロイトのこの営みに対して、小此木は以下のように評価する。

一般に亡き死者の思い出を語り、聞いてもらっているうちに、その聞き手に、死者への思いがのりうつり、この思いを受けとめてくれる対象は、あたかもその死者がのりうつった存在であるかのように思えてくる。(中略) フロイトもまた、亡き父の思い出をよき聞き手となってくれるフリースが、無意識のうちに父親の生まれ変わりでもあるかのような錯覚に陥ってゆく。この錯覚現象こそ、フロイトがそう名づけた「父親転移」そのものである。²⁴

では、まず転移とはいかなる現象なのか。『あるヒステリー分析の断片』(1905)の中でフロイトは以下のように定義している。

転移とは何か？ それは分析が進むにつれて目覚めさせられ、意識的なものにならねばならぬ刺激や空想の再版であり、コピーである。転移に見られる特徴は、以前知っていた人格に医者的人格が置き換えられるということである。(StA 6, S. 180)

つまり、本章の主張は、父親の死後まもなくはその対象喪失に対して躁的防衛のメカニズムによって喪の仕事をはねつけていたフロイトが、フリースとの自己分析において「転移」を起こす中で初めて喪の仕事に着手できたということになる。

そこでまず、フロイトが自己分析の最中にフリースに対して不可解な敵意を抱き始めたところを確認しよう。以下は、フロイトからフリースに宛てられた 1897 年 4 月 28 日の手紙からの引用である。

²³ ラプランシュ／ポンタリス前掲書、189~190 頁参照。

²⁴ 小此木 (1979)、100 頁。

夕べ僕は君に関係するある夢を見ました。(中略) 僕が父親自身の問題についてはまだ不確かですから、僕の過敏さは理解できるでしょう。つまり、この夢は僕のなかに無意識的に存在している君に対する怒りを集めています。²⁵

この引用にある夢は、『夢解釈』にも収録されている。²⁶ それだけフロイトにとって重要な意味のある夢だったのである。フロイトには、フリースを憎む動機などどこにも見当たらない。この手紙で表明された「怒り」は、フロイトが父親に向けていた敵意がフリースに転移されたものとみることが可能だ。フロイトはこの自らの父への敵意を普遍化して、エディプスコンプレックスの発見へと向かう。エディプスコンプレックスを発見したフロイトは、誘惑理論を放棄し、本格的に精神分析学創始の道を進んでいくことになる。

3-2. エディプスコンプレックスの発見

フリースとの自己分析の中で「転移の中の喪の仕事」を遂行することで、フロイトはそれまで意識していなかった父親への敵意が自分の心の中にあることに気づく。喪の仕事を達成するには、対象を喪失したことの悲しみを十全に受け入れることが求められるが、それは表面的な対象への愛着にふけるだけではなく、いわば心の奥底、すなわち無意識で悔みや恨みをも体験することである。

こうした「転移の中の喪の仕事」でフロイトはエディプスコンプレックスを発見する。もちろんそれもフリースに宛てた書簡の中にみられる。1897年10月15日のフロイトの手紙から当該箇所を引用しよう。

普遍的な価値のあるひとつの考えが僕の心に浮かびました。僕は母親への惚れこみと父親への嫉妬を自分の中にも見つけたのです。そして今やそれらが、必ずしもヒステリーに罹患した子供たちの場合ほど早い時期でないにしても、早期幼児期の一般的な出来事だと考えています。(中略) もしそうなら、知性が運命という前提に対して唱えるあらゆる異議にもかかわらず、エディプス王が持っている人の心をとらえる力が理解できます。(中略) 聴衆の誰もがかつて萌芽的には、そして空想の中では、そのようなエディプスだったので。そして、ここで現実に取り込まれた夢の充足を前にして、誰もが、自らの幼児期の状態を今日の状態から隔てているすべての抑圧の力でもって、怖れおののくのです。²⁷

²⁵ Freud (1985), S. 250f.

²⁶ Vgl. StA 2, S. 315f.

²⁷ Freud (1985), S. 293.

フロイトが初めて「エディプスコンプレックス」を用語として用いるのは、1910年においてであるが、この概念は1900年に出版された精神分析の記念碑的著作『夢解釈』において既にはつきりと明示されている。²⁸

まとめると、自己分析という営みの中でフロイトはフリースに父親像を転移させ、自身が無意識のうちに父親に対して敵意を抱いていたことに気づかされた。そして、この敵意が、おそらく臨床経験を通してだと思われるが、人類普遍のコンプレックスであることを発見してフロイトは誘惑理論を放棄し、エディプスコンプレックス仮説を唱えるに至るのである。もともとは父親の死に対する喪の仕事として機能していた自己分析を、フロイトは最終的に『夢解釈』の出版の成功にまで発展させた。

1章で確認したようにメランコリーが対象喪失に際する病的な反応であるという精神分析学のテーゼに基づけば、フリースとの間で行われたフロイトの自己分析は、メランコリーに陥る危機から脱するために、転移という現象を活用することで、対象喪失に対する正常な喪の仕事の遂行を促す効果があったとまとめることができる。

4. 「鼠男」の治療における「投影性同一視による喪の仕事」

1907年、フロイトはエルンスト・ランツァーという強迫神経症患者を治療する。そしてその治療体験を、1909年に『強迫神経症の一例についての見解』という論文として発表することで、ランツァーの症例は「鼠男」の症例と呼ばれるようになり、フロイトの症例論の中でも極めて重要な位置を占めることになる。のちに詳述するが、鼠男というあだ名はランツァーの強迫症状に由来する。

症例「鼠男」の概観に入っていく前に、ここで注目しておくべきことは、この症例と向き合っている頃のフロイトは、まさに父親喪失に際する喪の仕事の最終段階にいたことである。それを加味したうえで、クライン派精神分析の観点からフロイトが鼠男に施した治療を見ていこう。

「投影性同一視 (projective identification)」というクラインが概念化した心的機制がある。これは、もともとは精神病の心的機制を説明するために用いられたもので、攻撃的な対象関係の原型で、対象を摂取し、コントロールするために自我の好ましくない部分を対象の中に強引に押し込む機制である。²⁹ しかし、クラインは自身の死の一年前に発表した論考『大人の世界と幼児期におけるその起源』(1959)において、「共感 (empathy)」という概念をもって、「正常な」投影性同一視の機制の一つとした。クライン曰く、「誰かほかの人の立場に立つ」といった時に、

²⁸ Vgl. StA 2, S. 265-267.

²⁹ R・D・ヒンシエルウッド『クライン派用語辞典』(衣笠隆幸 総監訳) 誠信書房 2014年、217~251頁参照。

それはまた同時に誰か他人の立場に自分自身の一部、つまり自己の知覚のための何らかの能力を挿入する必要がある。³⁰ これはのちに、対象関係論の学派に属するウィルフレッド・ビオン（1897～1979）が『注意と解釈』（1970）で、「共生的」コンテイナー＝コンテインド関係といって、一方（患者）が他方（医師）に依存することが双方の利益になると詳述していることと重なる。³¹ 以上から本章は、フロイトが鼠男の治療の際に、自身を鼠男に投影性同一視、特に「共感」の機制を用いて、ビオンが言うところの「共生的」コンテイナー＝コンテインド関係の形成を行い、鼠男を治療することで自らの喪の仕事を進めた、という説を提示することになる。年代的にもこの主張は、2章で提示した亡父に対する喪の仕事が深化したことをうかがわせる『夢解釈』第二版の序文の書かれた時点と合致するし、鼠男の治療以降、フロイトが精神分析の精神療法としての可能性を大きく切りひらく端緒となったことにも適合する。³²

以上を踏まえて、ここからはランツァー（鼠男）の症例論の中でも患者の「亡父との心的葛藤」に焦点を当てる。この亡父との心的葛藤にフロイトは「共感」し、その葛藤の解決を助けることがひいては自分自身の父親喪失による喪の仕事を補完することになったのだと考えられる。

鼠男は恋人と父親に何かが起こるのではないかという恐れにひっきりなしに襲われていた。分析を進めていく中で、フロイトは患者の抵抗を押し切って、以下のような具体的な強迫観念を見つけ出す。患者は兵役についている。

大尉は、東方のとても恐ろしい刑罰について読んだことがあると語り始めたのです。（中略）「おしりの上にかめをかぶせ、このかめの中に鼠たちを入れます。鼠たちは——彼は再び立ち上がり、恐怖と抵抗を示すあらゆる徴候を自ら発した——食い入っていくのです」「肛門の中にですね」、そう補ってあげてよいように思われた。（中略）「その瞬間に、このことが私にとって大切な人に起こりはしないかという表象が思い浮かびました」。

（StA 7, S. 43f.）

この刑が、「鼠男」というあだ名の由来である。「私にとって大切な人」とはすなわち、恋人と父親である。ここで注目すべきことは、実は父親はすでに故人となっているという点である。

³⁰ Vgl. Klein, Melanie: *Envy and Gratitude and other works 1946-1963*. New York 1975, S. 258.

³¹ ビオンによると、「共生的 (symbiotic)」以外のコンテイナー＝コンテインド関係には、二つの対象が第三の対象を分かち合い、それが三者すべての利益になる「片利共生的 (commensal)」なもの、一方が他方に依存してしまう「寄生的 (parasitic)」なものが存在する。Vgl. Bion, Wilfred: *Attention and Interpretation: a scientific approach to insight in psycho-analysis and groups*. Tavistock 1970, S. 95.

³² ジャン＝ミシェル・キノドス『フロイトを読む——年代順に紐解くフロイト著作——』（福本修 監訳）岩崎学術出版 2013年、96頁参照。

患者の父もまた生前、下士官を拝命していた。その際、父はカード賭博に敗れて少額のお金を失ってしまった。幸運にも同僚が助けてくれたからよかったものの、父は軍を出て裕福になってからも、同僚にお金を返すことができないでいたのである。ところで、ランツァーは例の大尉から、A中尉に三・八〇クローネを返済するように命じられていた。実はこの命令は間違いで、ランツァーはA中尉からは借金をしておらず、本人もそのことを頭ではわかっていた。しかし、この大尉からの命令はコンプレックスの刺激語となり、父と同一化していたランツァーを困惑させる。彼が父と自らを同一化していた理由は二つある。一つは、同じ軍隊という組織にいたこと。そして、もう一つは、結婚について二人の女性の間で心が揺れていたことである。ランツァーの父は、愛していた女性を振り切って、身分と金銭的余裕のある女性と結婚することを選んだ。そして、息子にも自らと同じように、恋人はあきらめて、高貴な婦人と結婚することを望んでいたのである。こうしたことを知っていた患者は、以下のような強迫観念に襲われる。

もし父が生きていたら、あの婦人と結婚するという私の決意に対して、あの当時の子供の頃の場面と同じように怒るだろう。そうするとまた私が父に対して怒りを持つようになり、父にあらゆる災いが起こることを望む。その災いは、私の願望の万能性に鑑みると必ず達成されるに違いない。(Ebd., 7, S. 87)

「あの婦人」とは、現在交際中の婦人のことであって、子供の頃に怒られた思い出とは、6歳頃に自慰行為をして折檻されたことである。

この強迫観念についてフロイトは、「あの世で父親に災い(鼠刑)が起きる」という表象は、「もし父が生きていたら」という仮定に接続されると指摘する。要するにフロイトは、ランツァーの発病のきっかけは、父の死という出来事に対する悲しみであると指摘するのだ。

フロイトによると、ランツァー(鼠男)は、自らの治療によって鼠の譫妄から解放され、第一次大戦において兵士として立派な死を遂げた。³³

³³ しかし、このフロイトの主張には多少の疑問が残る。フロイトは、鼠男が喪のさなかにあると言いながら、一方では亡父に同一化したと述べているのであり、この同一化は対象喪失に伴っているため、ナルシズム的同一化である可能性が高い。であるならば、鼠男の精神疾患にはメランコリーの要素も見いだされるのではないかと思われる。事実、この患者は父の死の一年半後、自らを犯罪者扱いするという自己感情の低下を示した。そして、フロイトはメランコリーを「ナルシスの神経症(narzißtische Neurose)」として、精神分析療法では治療不可能な病であると考えていた。Vgl. StA 3, S. 336. このことは、今日の精神分析学の水準においては、フロイトの鼠男に対する治療の成功に対して強い疑いの目が向けられていることにも一致するのである。以下の論考は、フロイトが鼠男の治療に際して、転移解釈がうまくできていないことを指摘している。Vgl. Direcks, Michael: Freud's 'transference': Clinical technique in the 'Rat Man' case and theoretical conceptualization compared. In: *The International Journal of Psychoanalysis* 99 (2018), S. 58-81, hier S. 65-67.

フロイトは、鼠男が喪の状態にあり、その原因が父の死であるということに自らの同一性を見出していた。クラインの唱える「共感」の概念に照らして考えると、フロイトが鼠男の立場に立つためには、自らの能力を患者の立場に挿入する必要がある。そのため、自分自身が父に関する喪の仕事のある程度遂行できていなければ、フロイトは他者である患者が抱える同じ内容の喪の仕事「共感」によって助けることはできなかつたろう。そして実際、鼠男の治療に際してフロイトは患者に「共感」したろうと推定される。すると、フロイトはランツァーの喪の仕事を助けることによって、自らの喪の仕事も同時並行的に進められたはずだ。これが、本章が示唆する「投影性同一視による喪の仕事」である。

5. おわりに

以上のように、初期フロイトの歩みは、クライン派（対象関係論）の用語でもって跡付けることができる。フロイトは、自身が創始した精神分析学を展開するにあたって、執拗なまでに父子関係に着目していた。フロイト以後の精神分析は、こうしたフロイトの父親への偏執狂的なこだわりから解放されたかのように、母子関係を前面に押し出していくようになる。これは、フロイトの死の直後の時代に精神分析運動を担ったのが、アンナ・フロイトやクラインといった女性分析家であったことも大きな要因だと思われるが、そもそもフロイトを受容した者たちにとって、フロイトが「母親」という存在をあまりに軽視して、「父親」にこだわるさまが不思議に映ったからとも考えられるのではないだろうか。

しかし、本稿を振り返るとその疑問には幾ばくかのヒントが見いだされるかもしれない。すなわち、フロイトが精神分析学を創始する営みと、父の死という対象喪失に際する喪の仕事を進める営みは、軌を一にしていたのである。つまり、精神分析学の土台には「喪の仕事」が組み込まれていると言える。そして、この「喪」という概念はフロイトにとっての最初の本格的なメランコリー論『喪とメランコリー』の中から出てきたものである。

最後に本稿で検討してきたことが持つ射程について少し考えてみたい。21世紀を代表する精神分析家であるエリザベート・ルディネスコは、現代を「抑うつ社会」と名指した。³⁴ そして、フロイトが考察対象としたメランコリーの内実は、今日でいうところの「うつ病」の概念に近いものと考えられている。³⁵ クラインはメランコリーの治療を畢生の課題としていたので、³⁶ そうした彼女の理論の枠組みの中で、初期フロイトの歩みを跡付けることが完了された今、精

³⁴ エリザベート・ルディネスコ『いまなぜ精神分析なのか 抑うつ社会の中で』（信友建志／笹田恭史訳）洛北出版 2008年、14~72頁参照。

³⁵ 中山元はフロイトの『喪とメランコリー』の邦訳において、*Melancholie*を「うつ病」と訳した。ジークムント・フロイト『人はなぜ戦争をするのか エロスとタナトス』（中山元 訳）光文社古典新訳文庫 2008年、99~136頁参照。

³⁶ Vgl. Radden, S. 297-310.

神分析という学問には根幹からフロイトが『喪とメランコリー』で論じた問題が関わっているということが成り立ち、ルディネスコの言う「抑うつ社会」においてこそ精神分析は真価を発揮するという主張が補強される。

もともと、本稿はもっぱらフロイトの個人史をつまびらかにするものであり、社会論や文明論へ立ち入ることはしなかった。「抑うつ社会」におけるメンタルヘルスの問題に、精神分析の学説史研究が如何に寄与できるのか。こうした壮大な問いに応えるには別稿を俟たねばならない。

Sigmund Freuds anfängliche Schritte als eine Theorie der Melancholie

— Von der ‚manischen Abwehr‘ zur ‚Trauerarbeit durch projektive Identifikation‘ —

AMITANI Yuji

Für Sigmund Freud, den Begründer der Psychoanalyse war die Beschäftigung mit der Melancholie und ihren Mechanismen ein wichtiger Ansatzpunkt, um seine psychoanalytische Theorie zu entwickeln. Dabei war besonders „Trauerarbeit“ ein wichtiger Begriff, den Freud zuerst in *Trauer und Melancholie* (1915) verwendete. Viele Forscher glauben, dass die Trauerarbeit, die Freud selbst nach dem Tod seines Vaters leisten musste, eine grundlegende Erfahrung war, die er dann für seine Theorie nutzbar machte. Der vorliegende Aufsatz setzt sich unter Zuhilfenahme der Terminologie Melanie Kleins und ihrer Objektbeziehungstheorie mit Freuds Begriff der Trauerarbeit auseinander.

Als Freuds Vater Jakob 1896 verstarb, hatte Freud gerade seine ‚Verführungstheorie‘ aufgestellt, in der er behauptet, dass alle Neurosen letztlich auf irgendeine Form sexueller Misshandlung zurückzuführen seien. Mithilfe dieser Theorie versuchte er auch, die Neurosen seiner Geschwister zu erklären. Damit warf er seinem Vater vor, sich sexueller Misshandlungen schuldig gemacht zu haben, was in Freud ein Gefühl der Verachtung erzeugte. Laut Kleins Objektbeziehungstheorie führt ein solches Gefühl der Verachtung zu einer ‚manischen Abwehr‘, und diese manische Abwehr hat Freuds Trauerarbeit um den Tod seines Vaters stark behindert.

Daher begann Freud nach dem Ableben seines Vaters mit Wilhelm Fließ eine ‚Selbstanalyse‘, in der er sich an viele Begebenheiten mit seinem Vater erinnerte, was sehr verschiedene Emotionen diesem gegenüber ans Tageslicht brachte. Durch die ‚Übertragung‘ dieser Emotionen für Fließ konnte er schließlich seine Trauerarbeit vorantreiben und zudem sein Konzept des Ödipuskomplexes entwickeln.

Ebenso wichtig für Freuds Trauerarbeit war die Therapie, die er mit dem ‚Rattenmann‘ durchführte, bei der es – in der Terminologie der Objektbeziehungstheorie – zu

einer „projektiven Identifikation“ Freuds mit seinem Patienten kam. Die Ursache der Zwangsneurose des Rattenmannes war der Konflikt mit seinem Vater. Da Freud selbst zu dieser Zeit den Konflikt mit dem Vater noch nicht verarbeitet hatte, fühlte er dem Patienten gegenüber „Sympathie“. Sympathie ist aber eine Form der projektiven Identifikation. Man kann daher davon ausgehen, dass Freud bei der Therapie des Rattenmannes durch projektive Identifikation eigene Trauerarbeit leisten konnte.

Die verschiedenen Erfahrungen, die Freud im Verlauf seiner Trauerarbeit machte, ermöglichten es ihm, die Theorie des Ödipuskomplexes aufzustellen und eine Therapiemethode für Zwangsneurosen zu finden. So war die eigene Trauerarbeit der erste Schritt für ein tieferes Verständnis der Melancholie und der psychischen Prozesse, die mit ihr verbunden sind.